

ながのきたうら
長野北浦遺跡

所在地 稲沢市長野
(北緯35度15分25秒 東経136度49分04秒)
調査理由 都市計画道路稲沢西春線建設
調査期間 平成19年4月～平成20年3月
調査面積 5,500㎡
担当者 石黒立人・松田訓・樋上昇・蔭山誠一・
永井邦仁・早野浩二



調査の経過 長野北浦遺跡の発掘調査は、都市計画道路稲沢西春線の建設に伴う事前調査として、愛知県建設部都市整備課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。

立地と環境 本遺跡は稲沢市東部に位置し、西には古墳時代～古代の著名な遺跡である塔の越遺跡が隣接している。地形的には、三宅川左岸の後背湿地にあたり、遺構検出面での標高は約4mである。

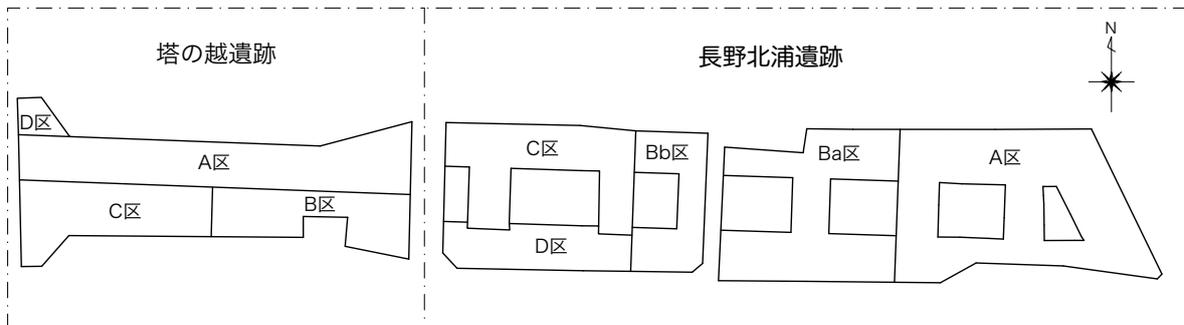
調査の概要 調査区は東からA～D区に分かれる。検出した遺構は古墳時代・飛鳥～奈良時代・鎌倉～室町時代・江戸時代以降の4時期である。

古墳時代 方墳・円墳各1基と竪穴建物5棟のほか、溝・土坑数基がある。
なかでもBa区で確認した方墳は、すでに削平されていたが、墳丘の一边が約25m、周溝幅約10mを測る大型の古墳である。東と西の周溝からは、4世紀前半(松河戸Ⅰ式期)の土器がまとまって出土した。南側約半分が調査区外となることから全貌は不明だが、伊勢湾周辺の前期古墳では、後方部の一边が25mで全長が40m前後の前方後方墳が多くみられることから、本古墳も全長40mクラスの前方後方墳である可能性を考えておく必要がある。

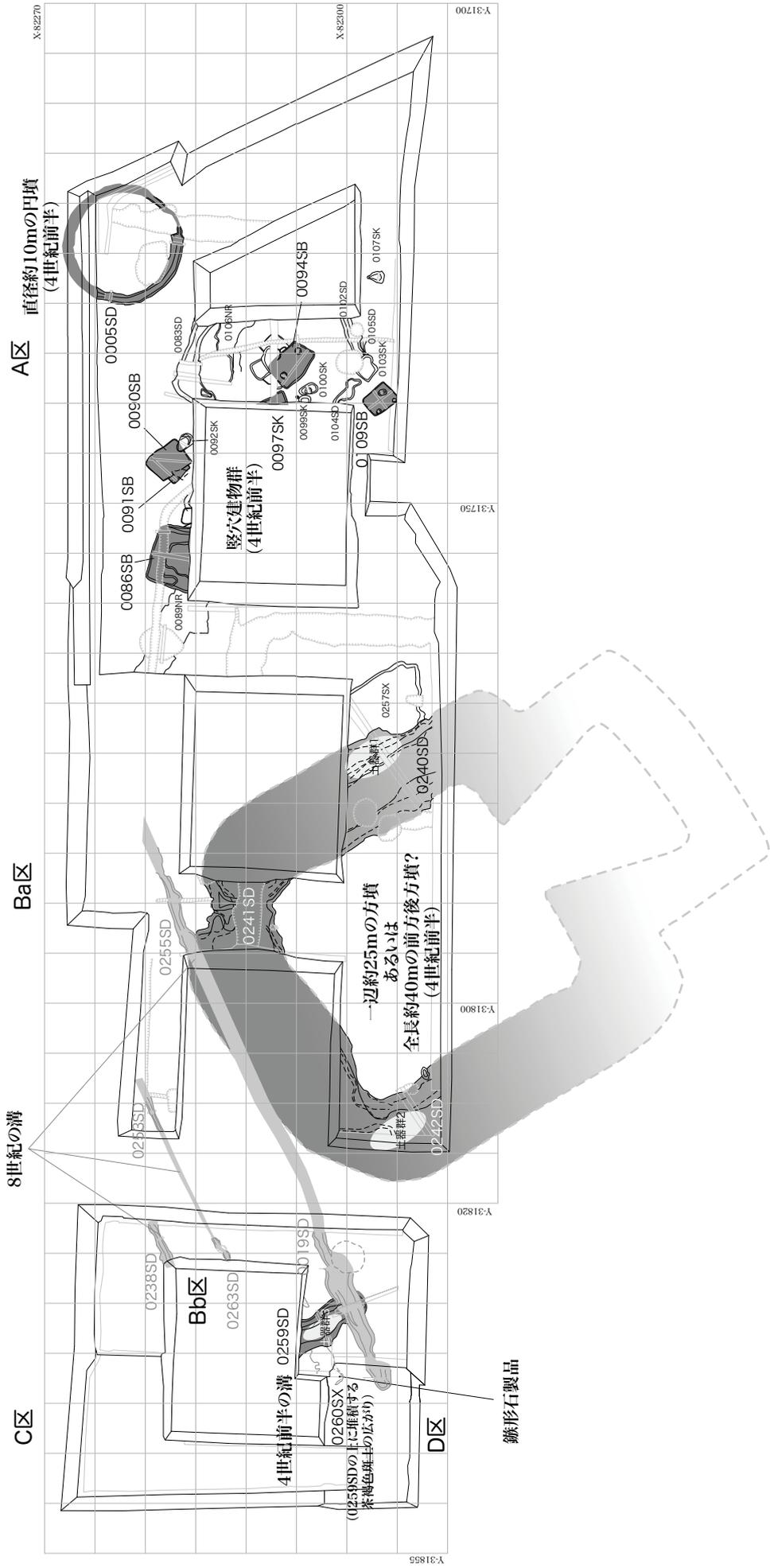
A区東端部で確認した円墳は直径約10mで、やはり4世紀前半に属する。

Bb区では、Ba区の方墳と同じ主軸方向をもつ溝0259SDがあり、ここからも4世紀前半の土器がまとまって出土しており、古墳の周溝である可能性が高い。

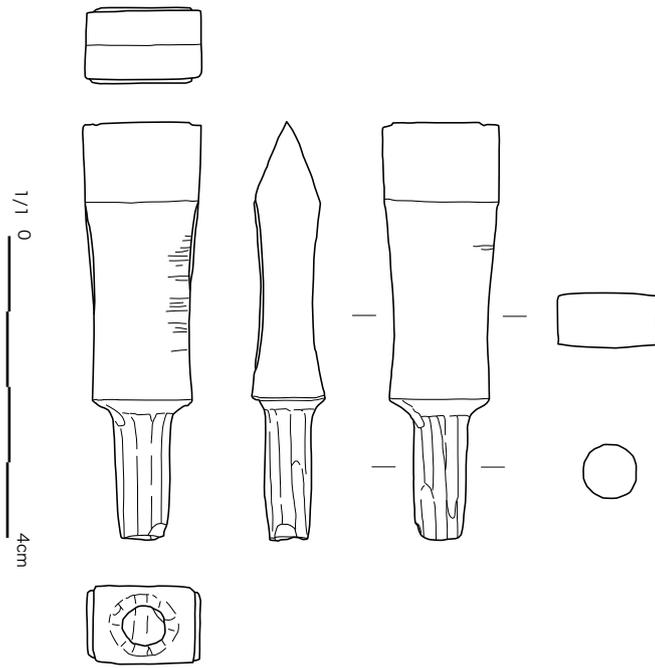
さらにその西のD区0260SXからは、緑色凝灰岩製の鏃形石製品が出土した。この遺構は0259SDの上に乗る不整形な二次堆積土の広がりであり、須恵器も出土している。鏃形石製品は鑿頭形とされるもので、奈良県桜井市メスリ山古墳や三重県伊賀市石山古墳の出土例に近似しており、愛知県下では初例となる(鏃形石製品としては犬山市青塚茶白山古墳に次いで2例目)。おそらく本来は、Ba区の大型方墳(前方後方墳?)に副葬されていたものであろう。



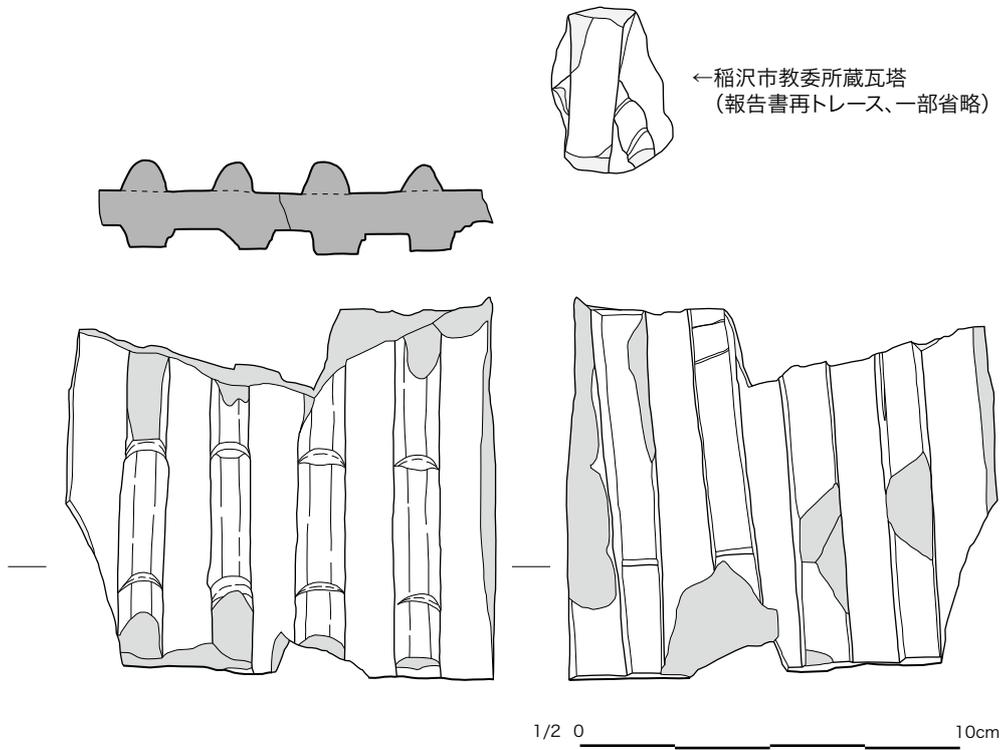
長野北浦・塔の越遺跡調査区位置図 (1/2,000)



古墳～奈良時代遺構配置図 (破線は西上免古墳による復元) (1/600)



0260SX出土鍍形石製品 S=1/1



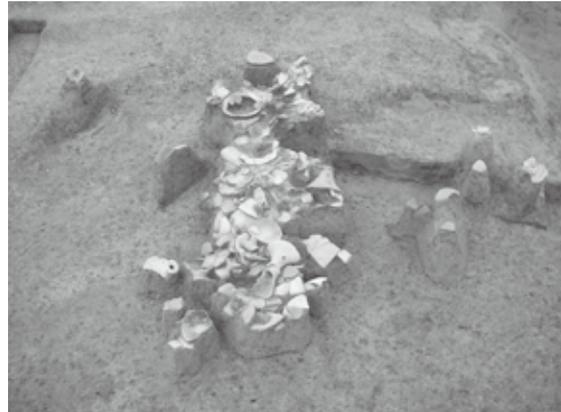
長野北浦・塔の越遺跡出土瓦塔 S=1/2



Ba区大型方墳or前方後方墳？全景(北から)



A区円墳(北西から)



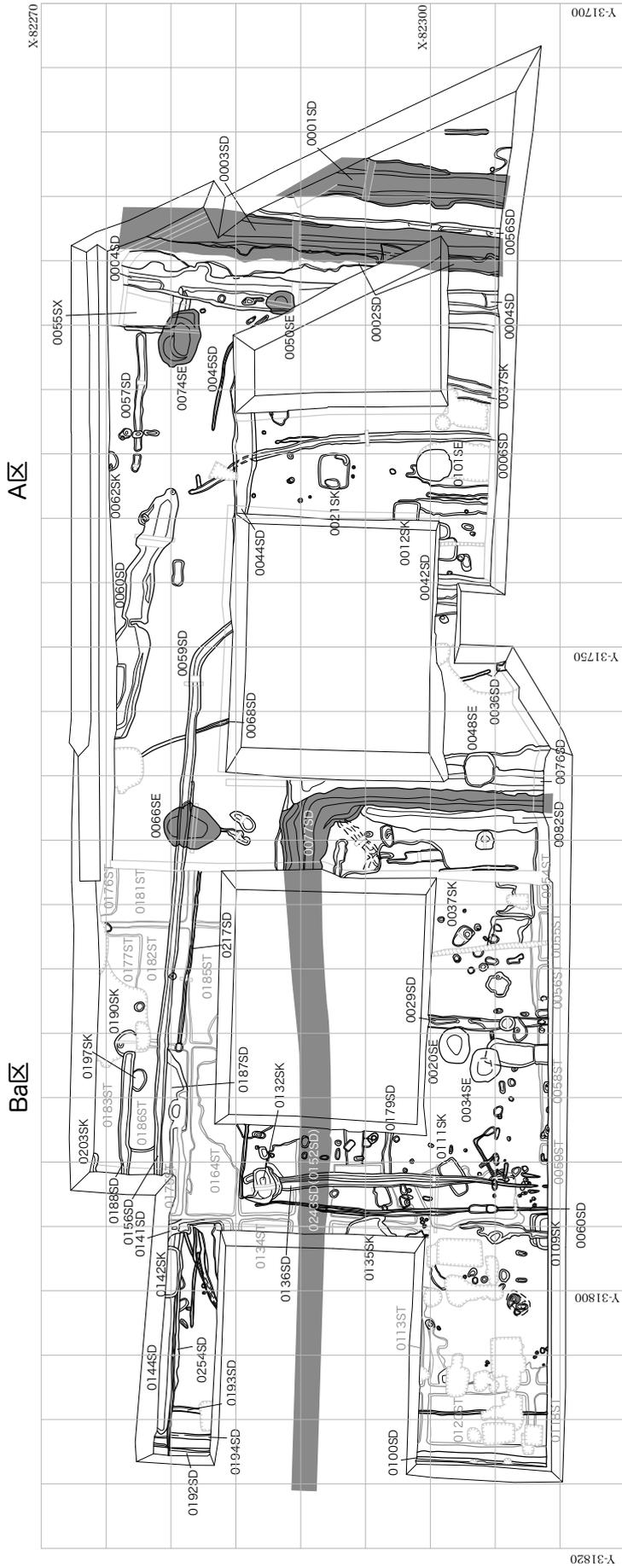
Bb区0260SX土器群3(北から)



鏃形石製品



D区鏃形石製品出土状況(南から)



鎌倉～江戸時代遺構配置図-1 (1 / 500)

このほか、A区の円墳より西側で竪穴建物を5棟と土坑数基を確認した。時期は古墳と同じ4世紀前半である。しかし、0086SB以外はいずれも小規模なものであり、棟数も少ないことから、大型方墳の被葬者の居住域とは考えにくい。

飛鳥～奈良時代

大型方墳の東周溝(0240SD)上層から7世紀後半の須恵器杯蓋が出土している。この時期まで墳丘が遺存していたか否かは不明だが、周溝はまだその痕跡をとどめていたことがわかる。

8世紀代には、方墳の北に3条の溝が走る。うち、最も南の溝(Ba区0255SD・Bb区0019SD)は、方墳の北周溝(0241SD)とBb区の0259SDを切って掘削されている。方位は方墳とほぼ同じで、当地の自然地形に沿っている。埋土の状況が鍬形石製品を出土した0259SXに近いことから、この頃に古墳が削平された可能性が高い。また、Ba区0187SD(江戸時代)からは8世紀前半の畿内系土師器(高杯)、同じくBa区0243SD(13世紀)から8世紀後半の瓦塔片が出土している。うち、瓦塔片は塔の越遺跡A区から出土したものと接合することから、13世紀(鎌倉時代)頃、長野北浦遺跡から塔の越遺跡にかけて大きく地形が改変されていることがあきらかとなった。

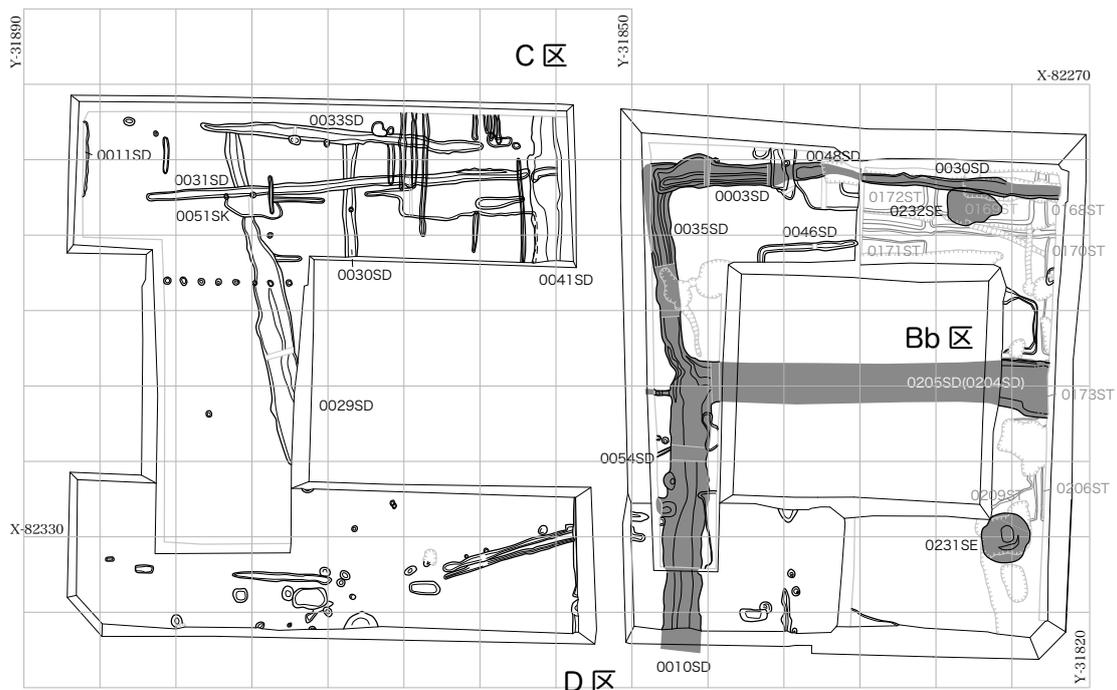
鎌倉時代以降

弘長3(1263)年に、本遺跡の南約100mに所在する真言宗の古刹万徳寺が再興される(伝承では創建は768年)。その時期、本遺跡には東西・南北方向に走る溝が新たに掘削される。A区001～004SDは、万徳寺境内の東を区画する溝の延長にあたり、鎌倉時代以降、現代にいたるまで再掘削されて機能し続ける。

A区0077SD・Ba区0243SD・Bb区0205SDはコの字状にめぐる一連の溝で、東西幅は約85mを測る。内部には井戸が多数あり、屋敷地の区画溝と考えられる。時期は13世紀代である。この屋敷地の北側には、同時期と推定される水田区画を確認している。

この土地利用のあり方は、天保12(1841)年に記された絵図とほぼ同じであることから、鎌倉時代以降近世にいたるまで、本遺跡周辺の景観はさほど変化しなかったと考えられる。

(樋上 昇)



鎌倉～江戸時代遺構配置図-2 (1/500)